

# ポストコンフリクト地域における スポーツを通じた多民族融和の試みに関する研究

奥野 輔\*

## 抄録

スポーツを活用した民族融和の試みにおいて、「民族」にまつわるメッセージがどのように発信されているかを明らかにすることを本研究の目的とする。

民族紛争を経験したポストコンフリクト地域で民族の和解が重要視される中、近年スポーツを民族間の和解に役立てようとする取り組みが見られるようになった。ポストコンフリクト地域では、「民族」にまつわる話題にはセンシティブな扱いが求められる。そのセンシティブな話題をどのように扱うかは、和解の取り組みの成否を左右する重要な問題であるが、民族問題の発信の方法についてこれまでの研究では十分に明らかにされてこなかった。そこで、本研究では調査事例としてボスニア・ヘルツェゴビナ モスタル市のスポーツアカデミー「Mali Most」を取り上げ、民族に関わるメッセージが Mali Most のスタッフ、保護者、児童の間でどのように発信・伝達されているかを調査する。

Mali Most は民族間交流の促進をプロジェクトの目的として運営されており、今回の調査ではスタッフ 3 名と Mali Most に通う児童の保護者 10 組に半構造化インタビューを実施した。スタッフは「民族」という表現を避け、「誰でも参加できる」や「皆のための場所」といった表現を用いたうえで、プロジェクトの目的を保護者に説明していた。今回の調査対象となった保護者のうち、8 組はスタッフからプロジェクトの目的について説明を受けていた。その 8 組には、家庭内で民族について自発的に子どもと話す保護者が 4 組、話さないと回答した保護者が 4 組含まれていた。調査結果からは、スタッフや保護者は子どもが自分で民族間交流を体験するよう意図して、民族に関わるメッセージを発信している可能性が示唆された。

Mali Most では「民族」についての言及が避けられ、アカデミーは「誰でも参加できる」場所として運営されている。また、子どもがスポーツの技能を高めることや試合に勝つことよりも、友達を作り、リラックスした楽しい時間を過ごすことが重視されている。Mali Most ではスポーツを実施する場に多民族の子どもが集まることによって、結果的に民族間交流が促進されていると言える。

キーワード：スポーツ、民族融和、ポストコンフリクト地域、ボスニア・ヘルツェゴビナ

---

\* 大阪大学大学院人間科学研究科 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1 番 2 号

# A Study on the Attempt to Promote Reconciliation through Sports in Post-Conflict Areas

Tasuku Okuno\*

## Abstract

The purpose of this research is to clarify how messages relating to 'ethnic groups' are disseminated in attempts to promote reconciliation between ethnic groups through sports.

The importance of reconciliation between ethnic groups is emphasized in post conflict areas that have experienced ethnic strife. In recent years, efforts to make use of sports for ethnic settlement have come to be seen. In post conflict areas, the topics related to 'ethnic groups' are treated sensitively. How to deal with this sensitive topic is an important issue affecting the success of aims to promote reconciliation in post-conflict areas; however, how to do so has not been fully clarified in previous studies. In this research, relevant policies at Mali Most, a sports academy in Mostar, Bosnia and Herzegovina, are examined. This paper discusses how messages relating to ethnicity are transmitted in Mali Most.

Interviews were conducted with three Mali Most staff members and 10 pairs of parents of children attending Mali Most. According to the staff and parents, the academy's value is that children experience the interchange between ethnic groups (such as Roman Catholic Croatians and Muslim Bosnians). Through the interviews, it was shown that the staff did not explain about ethnic exchange to children, but the staff did explain it to the parents. This paper shows that the staff spoke carefully about promoting ethnic exchanges while avoiding the expression "ethnic" and using expressions such as "anyone can come" or "a place for everyone" when they explained it to the parents. Eight groups of parents received an explanation about ethnic exchange from the staff. Among these, there were four groups who freely chose to talk with their children about ethnicities, and four groups who did not. It was found that the parents who talked with their children felt positively about talking about their ethnic groups, but the parents who did not were negative or did not feel the necessity of having the conversation about ethnicities. The remaining two groups did not receive an explanation about the ethnic exchange from the staff and they also did not talk with their children about their ethnic groups.

Mentioning the words "ethnic groups" is carefully avoided in Mali Most. Anyone can join the academy, and rather than emphasizing skills and victories, the academy stresses the importance of friendships and the enjoyment of the activities. Ethnic exchanges are promoted as a result.

Key Words : Sports、Reconciliation、Post-conflict Areas、Bosnia-Herzegovina

---

\* Graduate School of Human Sciences, Osaka University  
1-2 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871, JAPAN

## 1. はじめに

過去に民族紛争を経験した地域において、紛争中に争った民族の和解を促す活動の重要性が認識されている。近年、世界中でスポーツを活用して民族の和解に貢献しようとする取り組みが見られる。そもそもスポーツは 20 世紀の末から開発分野で活用され始めた。小林 (2014) によると、積極的に国際協力が行われながらも、いっこうに縮まらない先進国と開発途上国の格差の問題を前に伝統的に行われてきた国際協力のアプローチの失敗が認識されるようになった。その認識を背景に、個人と個人、個人と社会を有機的に繋げながら開発に寄与できるアプローチとして、スポーツが開発分野において注目されるようになったと小林は続ける。開発分野だけでなく、平和構築分野においてもスポーツを活用しようとする事例や議論への関心が高まりを見せる中、スポーツを民族の和解に活用するケースも見られるようになった。

民族の和解に取り組むにあたって、スポーツには民族間の分断をこえて社会的な繋がりや交流を再生産する機能があると報告されている。Schulenkorf (2010) によると、民族的に分断されたスリランカでは、スポーツイベントが個人間の友情や国民国家の枠組みに沿った社会的アイデンティティの構築に貢献している。また、Schulenkorf は、スポーツイベントは異なる民族出身の人々が一体感を感じる瞬間を生み出すこともあるとしている。Lea (2006, p.19) は「スポーツは、ステレオタイプを抑制し、信頼関係を築くための社会的ネットワークの構築において、共有された経験を提供することで主要な機能を果たしうる」と述べる。Lea によると、スポーツのリーグやトーナメントでは、紛争で敵対したステークホルダー同士が安全で中立な場で共に時間を過ごすことができ、そのことが信頼関係を築く一助となる。今後も紛争を経験した地域でスポーツを活用した取り組みが実施されていくことが予想される。

民族紛争を経験した地域では、「民族」問題はタブー、あるいは少なくともセンシティブな話題となっていることが多い。この点は、民族の交流を促進する事業や調査を実施する際の問題ともなる。実際に、小松 (2006) はボスニア・ヘルツェゴビナの教育に関する調査を進める中で、現地関係者から「民族問題はまだセンシティブである」との声を受け、調査紙の所属民族を尋ねる質問項目を削除したことを報告している。スポーツを活用して民族間の和解に取り組む事例の報告をみると、ドナー側が民族問題に配慮していること

がうかがえる。例えば、ボスニア・ヘルツェゴビナで実施されたスポーツイベントでは、参加者がスポーツにおける「競争」を意識しないようにすることで、民族間関係の悪化を招かないよう配慮がなされている (Gasser, 2004)。しかし、これまでの研究では配慮した事実は報告されているものの、民族問題に関わるメッセージを発信する方法については、十分な議論がなされてこなかった。

## 2. 目的

本研究では、民族問題にセンシティブな対応を求められる事例を取り上げ、民族に関わるメッセージがどのように発信されているかを明らかにすることを試みる。具体的には、スタッフや保護者、子どもの参加動機やプロジェクトの意義に対する認識を整理する。そのうえで、各ステークホルダーの間で民族に関わるメッセージがどのように発信され、伝達されているかに注目し、調査対象とする事例の意義について考察する。

## 3. 方法

主に日本からの支援によってボスニア・ヘルツェゴビナのモスタル市に 2014 年に設立されたスポーツアカデミー「Mali Most」を研究対象とする。モスタル市では、1990 年代にボスニア・ヘルツェゴビナで起きた民族紛争の影響で、クロアチア系とムスリム系の居住地が民族ごとに分かれている。教育も民族ごとに学校が分かち、同じ校舎を利用していたとしても民族ごとに異なる教室を利用するような状況が続いている。そのため、市内の子どもにとって他民族と出会う機会は限定されている。また、モスタル市では 2008 年以来、市議会選挙が実施できていない。このように、モスタル市では教育的、政治的に不安定な状態が続いており、民族問題は細心の注意を払うべき話題となっている。

Mali Most は 5~14 歳の子どもに、スポーツを通して他民族の子どもと交流する機会を提供することを目的に活動している。男子約 60 名、女子約 10 名の計 70 名程度の児童が所属し、サッカーのトレーニングが毎週 4 回実施されている。

2017 年 5 月 9 日から 8 月 3 日まで、モスタル市においてフィールド調査を行った。6 月 17 日から 6 月 29 日までの期間は日本に一時帰国し、調査に必要な文献を収集した。フィールド調査中には、スポーツアカデミーに通う児童と保護者及びスポーツアカデミーの関係者を対象に聞き取り調査を行った。聞き取り調査は半構造化インタビューを Mali Most の関係者及びア

カデミーに在籍する全児童（70人程度）の保護者の中から同意を得ることができた者を実施した。今回の調査対象者は、スタッフ3名（プロジェクトマネージャー1名、コーチ2名）と保護者10組となった。なお、インタビューは全て筆者自身が行なった。

プロジェクトマネージャーに対しては、通訳を介さずに英語でインタビューを実施し、コーチや保護者に対してはボスニア語（クロアチア語）-日本語の通訳を介して行った。調査結果の記述において、コーチや保護者の回答を引用しているが、その際は実際には通訳が話した内容を原文として掲載している。通訳は全て逐次通訳で行われた。また、コーチのうち1名（コーチB）については、インタビュー中に英語で回答する場面が見られたため、一部に通訳を介さない回答も含まれている。英語での回答を引用する場合は、筆者が邦訳した上で記載した。

## 4. 結果及び考察

### 4. 1. スタッフに対する調査結果

Mali Mostには常駐のスタッフとして、プロジェクトマネージャー1名、トレーニングを担当するコーチ2名の計3名が勤めている。プロジェクトマネージャーは、Mali Mostの立ち上げ当初から中心となって運営に携わっているものの、Mali Mostの専任の職員ではなく、モスタル市スポーツ協会から派遣されている。コーチ2名もMali Most専任のコーチではなく、他のサッカークラブでコーチを務めている。本項では、プロジェクトマネージャーとコーチがMali Mostでの勤務を開始した経緯やMali Mostの意義に対する彼らの認識を整理した上で、プロジェクトマネージャーとコーチから保護者や子どもにプロジェクトの目的がいかにかに説明されているかを示す。

Mali Mostのプロジェクトマネージャーはムスリム系の男性であり、青年期はバスケットボールの選手であった。「過去の戦争を生き抜き、戦争で良くない時間を過ごした経験があったから、このプロジェクトを良いプロジェクトだと認識して参加したいと思った」（プロジェクトマネージャー）と語る。また、日本の複数の組織が支援を検討していたことや、長期間のプロジェクトであったことも参加を希望する要因となったよ

うである。プロジェクトマネージャーはこのプロジェクトの意義について、「モスタルの子どもたちが私たちのアカデミーで市内の異なる地域、異なる学校から集まった子どもと一緒に何らかのスポーツを始めるための素晴らしい機会である」（プロジェクトマネージャー）と述べた。

Mali Mostには元プロサッカー選手のコーチが2名所属している。コーチAはムスリム系であり、Mali Mostのコーチを務めると同時に、地元の別のサッカーチームのコーチも務めている。コーチAは1990年代の内戦時に難民としてドイツに避難していた。ドイツではコーチとして10歳以下の子どもを指導していたことがある。その時の経験から、「自分の視野が広がり、（子どもが）多くの文化を学べるプロジェクトに参加してみたい」（コーチA）と思い、Mali Mostへの参加を希望した。また、Mali Mostの意義について、コーチAは3つの点を述べた。1点目はどの民族の子どももMali Mostに参加できることである。モスタル市のサッカークラブは一般的にムスリム系、クロアチア系と民族ごとに分かれている。コーチAにとって、Mali Mostは民族に関わりなく、全ての子どもが参加できる点に意義があったようである。2点目として、プロジェクトへの参加費が無料であることに言及した。コーチAによると、家庭が貧しいため、モスタル市内の別のサッカークラブに所属できない子どももMali Mostに所属することができる。3点目として、Mali Mostで子どもたちが、スポーツを通して、正しいふるまいや考え方を身に付けることができる点を重視している。

コーチBはクロアチア系であり、モスタル市スポーツ協会の職員及びモスタル市のクロアチア系プロサッカークラブ「HŠK Zrinski Mostar」のコーチを務める。「Zrinskiで選手としてプレーした経験があり、モスタル市内での知名度もそれなりに高いことを活かして、モスタル市の子どもたちに対して良い場所を作りたい」（コーチB）と思ったことを、参加の動機として述べている。Mali Mostの意義として、参加費が無料であるためモスタル市内の児童の全てが参加できること、そしてサッカーに限らず、スポーツをプレーすることを楽しめ、健康にも良いことをあげている。また、複数民族から児童が集まり、異なる民族の価値観に触れる点、さらには保護者同士が良い絆を作ることができる点にも言及した。

次に、プロジェクトマネージャーやコーチ2名がMali Mostに所属する保護者及び児童に対して、どのようにプロジェクトの目的である民族間交流の促進に

<sup>1</sup> ボスニア・ヘルツェゴビナでは、ボスニア語、クロアチア語、セルビア語が公用語として指定されている。それらの公用語は文法などの言語構造にほとんど違いが見られない。そのため、各言語間で十分な意思疎通が可能であり、本研究では全てのインタビュー調査において同じ通訳者が通訳を行った。

について説明しているかを述べる。プロジェクトマネージャーは Mali Most の立ち上げ前に、プロジェクトの目的や活動内容を保護者にアナウンスする機会を設けていた。その場には、多くの児童も保護者と一緒に参加しており、児童に対してもプロジェクトの目的について説明が行われた。ただし、プロジェクトマネージャーは民族間交流について説明する際に「異なる人々と出会い、その人たちと友達になること」(プロジェクトマネージャー) という表現を用いたと述べている。

「モスタル市の全ての地域から子どもたちが集まっている。ここには、皆、異なる民族、異なる民族グループが含まれている。そのため、私たちがしたいのは…、つまり彼らはここに来て、トレーニングをする時にリラックスをする必要がある。彼らはリラックスしなければならない。しかし、トレーニング中に、彼らは出会い、ある男の子たちやある女の子たちが異なる民族から来ていることを理解するだろう。そう、彼らは理解する。そして、私たちはそのこと(筆者注; プロジェクトの目的のこと)について、私たちのアカデミーが開催するトレーニング、遠征、教育プログラムの実施中に議論するだろう。しかし…、しかし私たちはそのような点(筆者注; 民族に直接言及するような話題及び質問)を強調したくない。前面に押し出して強調したくない。だから、私たちは議論するが、とても慎重に行う」(プロジェクトマネージャー)

と述べられたように、保護者や児童への説明では、表現の仕方に注意を払っていることがうかがえる。

コーチもプロジェクトマネージャー同様、保護者にはプロジェクトの目的について、説明を行なっている。児童に対しては、他民族との交流について説明することに、コーチは両者とも否定的であった。実際にどちらのコーチも児童に対して、民族間交流に関する説明を普段のトレーニングの中で行なっていない。コーチ A によると、子どもはプロジェクトの目的について、スポーツの練習を通して自然に学習するため、プロジェクトの目的を改めて説明する必要性を感じていないと言う。コーチ B は、子どもたちに民族に関わる話題を提示することに、より否定的であり、Mali Most を「みんなのための施設」(コーチ B) と呼び、学校や自宅などで民族に関わる話題を耳にする子どもたちに対して、Mali Most で民族にまつわる説明をするべきではないと考えている。さらに、2人のコーチは共通して、児童が民族問題について直接コーチや周囲の大人から聞かなくても自分たちで感じ取っていると述べた。

#### 4. 2. 保護者への調査結果

本項では、保護者が語った参加動機、プロジェクトの意義に対する保護者の認識、プロジェクトの目的について子どもとの会話の有無の3点について詳述する。調査対象者とした保護者について、表1に示す。

表1 調査対象者(保護者)

対象者	性別	民族	子ども <sup>2</sup> の性別(年齢)
A	女性	クロアチア	女子(13)
B	女性	ムスリム	男子(13)・男子(9)
C	男性	クロアチア	男子(13)・男子(11)
D	男性	ムスリム	男子(10)
E	女性	ムスリム	男子(14)・女子(12)
F	女性	クロアチア	女子(12)
G	女性	クロアチア	女子(11)
H	女性	ムスリム	男子(10)・男子(6)
I	男性	クロアチア	男子(6)
J-夫	男性	クロアチア	男子(10)
J-妻	女性	クロアチア	

それぞれの保護者が自分の子どもを Mali Most に通わせた経緯を整理すると、子どもが主導して Mali Most に入ったケースと、保護者が主導して Mali Most に入会したケースに大別される。前者に該当するのは、A、B、E、F、G、H、Jの7組である。A、E、F、G、H、Jのケースにおいて、子どもがサッカーをプレーすることを希望して、Mali Most に入会を保護者に相談しており、保護者がその希望を認めることで入会している。Bのみやや事情が異なり、子どもは Mali Most に入会する前から別のサッカークラブに所属している。Bの子どもはそのサッカークラブの友人からの紹介をきっかけに Mali Most に所属するようになった。

次に、保護者が主導して、Mali Most に所属するようになったケースをみる。該当する C、D、Iの3組のうち、CとIは Mali Most のコーチと個人的に知り合いであり、コーチを通して Mali Most を知ることとなった。Dは子どもが元々所属していたサッカークラブが移転することになり、移籍先のサッカークラブを探している中、モスタル市内で開催された Mali Most に関する説明会でその存在を知った。

今回の調査対象者のうち、子どものサッカーをプレーすることへの欲求が Mali Most への加入の決め手となったケースは A、D、E、F、G、H、Jの7組であ

<sup>2</sup> Mali Most に所属している子どものみ示す。

る。B、C、Iについては、子どものサッカーへの欲求がMali Most加入への後押しとなったことが推測されるが、決め手となるような決定的な要因であったか否かについては、今回の調査で明らかにすることはできなかった。

Mali Mostの意義について、10組の保護者のうち、AとEを除く8組は「全ての子どもが参加できること」をあげ、また「子どもが楽しい時間を過ごすこと、(他の民族の子どもを含めて) みんなと友達になること」が重要であると語っている。

AとEを除く8組の中には、自分の子どもが「どの民族であろうと関係がないこと」あるいは「異文化、異民族をリスペクトする必要があること」といった学びを得ることをプロジェクトの意義として認識する回答も見られた。また、IとJは、自分の子どもが全ての民族が集まる場に参加することから異文化の差異を尊重する必要性を学ぶと話す。Jによると、「異文化の違いが存在しているとMali Mostを通してわかってきて、全ての違い、差を尊敬しなくてはならないと子どもたちは学ぶことができる」(J)と言う。Mali Mostプロジェクトを通して、自分の子どもが民族の違いを乗り越えること、異文化理解の力を高めることを期待していることがうかがえる。

AとEは、直接的に民族の話題や全ての子どもが参加できることを意義として述べなかった。Aは、コーチがトレーニングにおいて参加している児童を平等に扱うことが最も素晴らしい点であると述べている。Eにとっては、子どもがMali Mostに参加していて嬉しそうに見える点が最も重要ということであった。

DとF、Jの3組は、プロジェクトの意義として、参加費が無料であることについて言及した。DとJは無料であることによって、継続的に参加できるようになることを良い点としてあげている。Fは無料であることで全ての子どもが平等にMali Mostに参加できる点の教育的効果を認識している。

最後に、子どもとのプロジェクトの目的に関する会話の有無について述べる。「コーチからプロジェクトの目的として、民族間交流に関する説明を受けているか」また「家庭内で保護者から子どもに対して、民族間交流に関わる会話をしているか」の2点について、調査対象者を分類する。コーチから説明を受け、家庭内でもプロジェクトの目的について話していた調査対象者は、B、D、H、Jの4組であった。このうち、B、H、Jの3組は家庭内で積極的にMali Mostの目的や内容について会話している。Bは、Mali Mostと同じような方針を持って子育てをしていると語り、「どの民族の

子どもでも友達になっていい」と自分の子どもに伝えている。

C、E、F、Iは、コーチからプロジェクトの目的(複数民族からの参加)について説明を受けているが、家庭内で自分の子どもとその目的について会話はしていない。Cは民族に関わる会話を家庭内で行わない理由について、子どもたちが幼く、(民族に関わる)複雑な話を深く理解できない可能性があるとして述べた。また、どの民族の子どもとも仲良くするという方針のもと子育てを行なっているため、自分の子どもたちには他の民族の友達も多く、家庭内で民族に関わる内容を話す必要がないと語った。EとIは、親から民族に関わるメッセージを子どもに伝えるのではなく、子ども自身が経験を通して理解することを期待している。Fは、自分の家庭では「人間には良い人と悪い人の2種類しかない」(F)と教えているため、民族に特化した会話を家庭内で行なったことがなかった。

A、Gの2名は、両者とも娘がMali Mostに通っており、Mali Most以外に女子がモスタル市内でサッカーができる場所の心あたりがないと話している。保護者への説明会にも参加しておらず、単に子どもがサッカーをプレーできる場所としてMali Mostを認識している。ただし、AもGもMali Mostにはどの民族の子どもも参加できる点を理解していた。

#### 4. 3. 考察

全ての調査対象者のケースにおいて、「サッカーをしたい」あるいは「友人と楽しい時間を過ごしたい」という子ども自身の欲求がMali Mostへの参加の誘因になっていると推測される。ボスニア・ヘルツェゴビナで実施された他のスポーツイベントにおいても、子どもは楽しい時間を過ごすことをモチベーションに参加している(Gasser, 2004)。また、Washiya (2017)はボスニアの東方部に位置するスレブレニツァのサッカークラブFKGの調査を通して、受益者が大人の場合でもサッカーへの意欲が主な参加動機であると報告している。どの事例においても、サッカーをプレーする者にとっては、「サッカーをプレーすること」や「サッカーを通して楽しい時間を過ごすこと」が参加への大きなモチベーションとなっている。

一方で、プロジェクトマネージャーやコーチは3名とも、参加した子どもがスポーツの技能を向上させることよりも、スポーツに触れる機会を持てること、他の民族出身の子どもと交流を持つことが活動の主たる価値であると考えている。保護者への聞き取りからは、B、C、D、E、F、H、I、Jの8組が民族間交流の促

進に賛同していることが明らかになった。

「民族」の話題の伝達に目を向けると、Mali Mostの説明会でプロジェクトマネージャーやコーチらは、民族間交流の促進をプロジェクトの目的として多くの保護者や児童に伝えていたことが明らかになった。ただし、プロジェクトマネージャーやコーチは子どもに対して民族の話題を強調することに否定的であり、普段の活動では民族の話題に触れていなかった。調査対象とした保護者には、子どもと民族について積極的に会話を持つ者、持つことに否定的な者、会話する必要性を感じていない者が含まれていた。また、Mali Mostでは、「民族」について言及する代わりに、「誰でも参加できる」といった表現が用いられていることが示された。

このように民族の話題が扱われる理由として、スタッフや保護者が子どもたちに、スポーツに取り組む中で「自分自身で民族間交流を体験すること」を期待していることが考えられる。実際に、プロジェクトマネージャーやコーチ、保護者の多くが民族間交流を自分で体験することの意義を述べていた。また、子どもと民族についての会話を持つ保護者も、持たない保護者も子どもが「自分の頭で考えること」を重視していた。

Mali Mostでは「民族」についての言及が避けられ、アカデミーは「誰でも参加できる」場所として運営されていることが明らかになった。また、子どもがスポーツの技能を高めることや試合に勝つことよりも、友達を作り、リラックスした楽しい時間を過ごすことが重視されている。Gasser (2004) は、他の事例においても、“Sports for all”が活動の哲学として掲げられる等、競争の側面が強調されず、寛いだ雰囲気を作り出されていると報告している。今回調査対象者となったMali Mostの関係者や保護者からもそのリラックスした雰囲気を評価する声が聞かれた。

Mali Mostに所属する児童はリラックスした雰囲気の中で、純粋にスポーツを楽しみ、他民族の子と友人になる。つまり、スポーツを実施する場に多民族の子どもが集まることによって、結果的に民族間交流が促進されていると言える。

## 5. まとめ

本研究では、Mali Mostのスタッフ、保護者、児童の間で民族の話題がどのように伝達されているかを明らかにすることを試みた。民族に関わるメッセージは、「民族」という表現を避けた上で、子どもが民族間交流を自分で体験することを意図して、発信されている可能性が示された。

今回の研究では、スタッフがプロジェクトについて、ドナー側や国外に発信する場合の言説を調査することはできなかった。また、Mali Mostに参加することで、スタッフや保護者、子ども間の会話に変化が生まれることも考えられる。それらの点に留意して調査を進めることを今後の研究の課題としたい。

## 【参考文献】

- Gasser, Patrick K. & Anders Levinsen (2004) “Breaking Post-War Ice: Open Fun Football Schools in Bosnia and Herzegovina” *Sport in Society*, 7(3) : pp. 457-472.
- 小林勉 (2014) 国際開発とスポーツ援助—スポーツ援助の動向と課題—。 *スポーツ社会学研究*, 22(1) : 61-78 頁。
- 小松太郎 (2006) ボスニアにおける教育と民族共存・融和についての考察。九州大学大学院教育学研究紀要, 第9号 (通算第52号) : 103-120 頁。
- Lea-Howarth, J. (2006) “Sport and Conflict: Is Football an Appropriate Tool to Utilise in Conflict Resolution, Reconciliation or Reconstruction?” *Contemporary War and Peace Studies MA Dissertation*, University of Sussex  
<[https://www.sportanddev.org/sites/default/files/downloads/42\\_sport\\_and\\_conflict\\_reconciliation\\_ma\\_dissertation.pdf](https://www.sportanddev.org/sites/default/files/downloads/42_sport_and_conflict_reconciliation_ma_dissertation.pdf)>2018年1月9日アクセス。
- Schulenkorf, N. (2010) “Sport events and ethnic reconciliation: Attempting to create social change between Sinhalese, Tamil and Muslim sportspeople in war-torn Sri Lanka” *International Review for the Sociology of Sport*, 45(3) : pp. 273-294.
- Washiya, Y. (2017) “Playing together to be able to play – extending field-based inquiry from post conflict Bosnia and Herzegovina” *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*, 9(4) : pp. 453-468.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

